

資料 1－1

諮詢物件調書

種別	有形民俗文化財
名称・員数	久慈・山形の牛方関係資料 (くじやまがたのうしかたかんけいしりょう) 165点
所有者(保持者・団体)の住所・氏名(名称)	久慈市川崎町1番1号 久慈市教育委員会
文化財の所在場所	久慈市歴史民俗資料室 久慈市山村文化交流センター(おらほーる)
指定理由	<p>久慈・山形の牛方関係資料は、「塩の道」(久慈・野田街道)によって、岩手県沿岸部から内陸部に塩や海産物を運ぶ際に、牛をつれた「牛方」が使用した用具である。</p> <p>牛方の用具は主に、①牛方の身支度用具、②荷役用具、③牛の飼育に関する用具から構成される。牛方は身支度品として、「笠」をかぶり、「みの」を身に着け、「つまご」を履き、脛には「はんばき」を巻いた。胸に着用した「前だて」は、朝露がついた草で体が濡れるのを防ぐためのもので、牛方だけが身につけ、農作業では使わないという特徴があった。荷役用具は荷物を運搬する際の牛の装備品であり、「牛の鞍」や牛の口にかぶせる「くつご」、塩を運ぶ際の「塩かます」など、用途に応じてその種類は多岐にわたる。牛の飼育に関する用具は、物資の運搬に使役する牛たちを育てるために必要な用具であり、「押し切り」や「飼葉桶」は牛に餌を与えるために使用され、「とな釜」や「へら」は、冬期間に餌を煮る際に使われたものである。このように、牛方の生活は牛の生活と共にあり、これらの用具はその生活を垣間見ることのできる資料である。</p> <p>また、荷役の際には牛の群れを統率するために「ワガサ」と呼ばれるリーダー牛が必要であったが、この「ワガサ」を決めるために牛を闘わせる習俗がかつてあり、「角突き」「突き合わせ」「ベゴ突き」「ベゴ相撲」などと呼ばれ、現在の闘牛大会にも影響を与えていとされる。このような習俗も、牛方による荷役の運搬に関わる背景を構成する要素として重要である。</p> <p>牛を使って物資を運搬した牛方は、他地域との物資の交易とそれに付随して様々な生活文化をもたらした。この牛方の活動に関する資料は物資を運搬した街道に関する交通史、運搬した塩や鉄等に関する産業史、飼育した牛に関する畜産業史など、岩手県の人と牛の関わりを含めた歴史・文化を伝える資料として貴重である。</p> <p>以上のことから、本文化財を岩手県指定有形民俗文化財として指定することが適当である。</p>

【岩手県指定文化財指定基準】

第3 有形民俗文化財指定基準

- 1 (3) 交通、運輸、通信に用いられるもの
- 2 (2) 時代的特色を示すもの
- (3) 地域的特色を示すもの



牛方の身支度用具



荷役用具



牛の飼育に関する用具

指定文化財調査報告書(有形文化財・有形民俗文化財)

調査員 山本 玲子
令和7年5月 28 日ほか

1 所有者の住所・氏名	岩手県久慈市川崎町1番1号 久慈市教育委員会
2 文化財の所在場所	岩手県久慈市小久慈町第37地割32番1 久慈市歴史民俗資料室 岩手県久慈市山形町川井第13地割38番地 久慈市山村文化交流センター(おらほーる)
3 種別	有形民俗文化財
4 名称	久慈・山形の牛方関係資料
5 員数	165点 (牛方の身支度用具:49点、荷役用具:39点、牛の飼育に関する用具:77点)
6 品質・形状	別添参照
7 寸法・重量	別添参照
8 作者	—
9 時代又は年代	藩政時代～昭和30年代
10 画譜・奥書・銘文等	—
11 伝来	<p>久慈地域ではその昔、塩は海水を直接釜で煮詰める「直煮(じきに)製法」で生産されていた。釜は土釜(貝殻を焼いて白灰にし、土と練り合わせて作ったもの)と鉄釜があった。</p> <p>久慈の塩釜は、元禄9年(1696年)に36基、享保16年(1731年)に34基あり、野田の塩釜は、天和3年(1683年)には41基、嘉永3年(1850年)には27基あった。</p> <p>牛方はその製造塩(食塩)や鉄、海産物、沿岸地域の物資などを牛に積み、二戸や三戸・盛岡・鹿角方面に運搬し、米や衣類などと交換した。</p> <p>塩や海産物を内陸に運ぶのに使われた久慈・野田街道は通称「塩の道」と呼ばれ、盛岡城下と三陸海岸北部の久慈及び野田を結ぶ街道で、沼宮内の北側の尾呂部(おろべ)で奥州街道から分岐し、東方の沿岸に向かい葛巻・山形平庭・山根木壳内・下戸鎖を経て宇部・野田に向かう沼宮内廻り野田街道と、山形の角掛(つのかけ)峠で分かれて久慈を経て野田に行く久慈街道の二つのルートがあ</p>

る。

塩の道を通って荷物を運ぶ牛の群れを「ハズナ（端綱）」と言い、通常は7頭の雄牛で構成されるが、5頭・6頭の場合もあった。一人の牛方が牛を扱い得る限界は8頭である。

ハズナの先頭を歩いて統率するのが「ワガサ」と呼ばれるリーダー牛である。

春先に牛方が立ち合いの上、牛に角突きをさせて優劣をつけ、ワガサを決定した。「塩の道」を歩く牛の群れではワガサを先頭にすると弱い牛はその後につき、決して追い越すことはせず、牛方はワガサをコントロールすればハズナを統率できた。このような牛を鬪わせる習俗を、地元では「角突き」・「突き合わせ」・「ベゴ突き」・「ベゴ相撲」などと呼んでいた。

1頭の牛に積む塩の量は3斗（約540入り）を2俵、つまり1駄である。「ワガサ」の背には塩のほか、「牛味噌」（人間が食べる味噌より塩味を2割方濃くしたもの）や道中に必要な最小限の食料、着替え、鍋や釜などを入れた「かます」を積んだ。

牛方による交易活動は秋が多く、一日 60~70 頭もの往来があるときもあった。牛の歩みは、登りも降りも速度は変わらず、一日の歩行時間は8、9時間（20~25 km）時速3 km弱であることから、物資の運搬に適していた。「牛は追え、馬は牽け」という言葉があり、牛の後ろについて行けば、濃霧や夜の闇の山中でも、目的地に着くことができた。

牛方のいでたちは、朝露で身体が濡れるのを防ぐため身体の前面に「前だて」をつけ、「つまご」をはき、脛に「はんばき」を巻き、笠を被り、雨の日は「みの」を着た。

「前だて」は、初夏の頃にシナノキの皮を剥ぎ、その内がわ（マダ）を乾燥させた後、首から腰の部分までマダを組んだり、編んだりして作ったもので、牛方の身支度の特徴である。

「笠」は「男やま」ともいい、スゲ製で、晴天、雨天に関わらず必ず被った。これも牛方の身支度の特徴である。

牛に荷物を積むにあたっては、牛の背に木製の「鞍」を乗せ、マダやブドウの蔓皮で作った「はるび（腹帶）」で、牛の身体に鞍を固定させた。長旅の時は鍋、食料、雨具のほか牛の餌（ヒエ、ハギ、クズを刻んだもの）を「かます」に入れて積み、塩を運ぶために使う「塩かます」は、茅（かや）で作られたもので、32 kg程の塩が入った。また牛の口には樹皮の縄で作った「くつご」をはめたが、これは牛が道草を食う気が起こさないようにするためのものであり、さらに、牛が砂利道を歩いた時、前足を痛がることもあるため、その保護のために、足に「牛のくつ」をはかせることもあった。

牛方は「切刃（きりは）」とよばれる刃物を常に携帯していたが、これは護身用であると同時に、牛が転倒した際に牛の身体に固定している鞍を外すためにヒモを切る時に使うものである。

牛の飼育用具では、餌を切るための「押し切り」があり、これは、ハギ、クズなどのほか、脱穀し終わったヒエ、ソバ、マメ（大豆）の茎（から）、ダイコン

	<p>の葉などを1キン位に刻んで餌にするためのものである。「押し切り」は角材や枝付きの幹を利用して作った台に、鉄製の幅の広い歯を打ち込んで作ったものである。</p> <p>さらに「かぶ切り」でカブ、ジャガイモ、ダイコン、カボチャなど、畑作物のくずを突いて細かく刻んだものを「となはり」で混ぜ、「飼葉桶」で食べさせていた。さらに冬は「とな釜」で餌となる材料に味噌を加えて煮て牛に食べさせた。</p> <p>このように、牛方の生活は牛の生活と共にあり、これらの用具からその生活を垣間見ることができる。</p>
12 保存・活用の方向性	<p>久慈市山形町で行われている「平庭闘牛大会」は、「ワガサ」と呼ばれるリーダー牛を決めるために行われていた「牛の角突き」（平成28年久慈市指定無形民俗文化財）がルーツである。「平庭闘牛大会」は旧山形村で観光行事として、昭和35年6月19日に「平庭高原つづじまつり」の行事の一環として行われたのが始まりである。</p> <p>さらに昭和58年に「山形村農村青年クラブ会」と「闘牛飼育者有志」により、「いわて平庭闘牛会」が設立され、5月「わかば場所」、6月「つづじ場所」、9月「しらかば場所」、10月「もみじ場所」が行われている。</p> <p>この闘牛は、牛の習性や、牛方と牛との関わりの一端を今に伝えるものであり、牛方関係資料と関連付けた活用がなされれば、牛方の生業活動と関係資料の一層の理解に資するものと期待される。</p>
13 所見	<p>藩政時代に牛を使って物資を運搬した牛方の活動は、他地域との物資の交易とそれに付随して様々な生活文化をももたらした。この牛方の活動に関わる資料は、物資を運搬した街道に関わる交通史、運搬した塩や鉄等に関わる産業史、飼育した牛に関わる畜産業史等、人と牛との関わりを含めた歴史・文化を伝える資料として貴重である。</p>
14 その他参考となるべき事項	<p>牛方は野宿をすることもあった。牛の餌となる草地と水があるくぼ地になっている所に、角を外側に向けて円陣を作つて牛を寝かせ、野獣の襲撃に備えた。平庭峠には野宿した場所である「奥清水のベゴ泊まり場」が残っており、水飲み木船も復元されている。</p> <p>また、牛方が泊まった「牛宿」として、馬寄平（うまよせたい）に馬場家跡があり、塩をはじめ鉄・雑穀等の交易場であり、中継・荷宿・泊まり場の役割を果たした。現在は、塩を保管した板倉が残されている。</p> <p>藩政時代にたら製鉄産業が盛んになると、鉄は関東や越後までも運ばれ、牛自体も売り払い、牛方は身軽になって帰ってきた。この南部牛（うし）が使役牛として評判がよく、東日本各地で売られ活躍した。</p> <p>盛岡と野田・宇部を結ぶ通称「塩の道」沿いには、「馬継所印」（久慈市指定文化財）、「合戦場の一里塚」（久慈市指定文化財）、「白石峠の一里塚」、「関御番所跡」、「旧馬場家板倉」、「奥清水のベゴ泊り場」などの関連する文化財が残されている。</p> <p>山形町の短角牛は、闘牛の素牛（もとうし）として、新潟県や沖縄県・鹿児島県</p>

	などに供給されており、闘牛育成の産地の役割も担っている。
15 指定等の該当基準	<p>(指定基準)</p> <p>有形民俗文化財として</p> <p>1 (3) 交通、運輸、通信に用いられるもの</p> <p>2 (2) 時代的特色を示す</p> <p>(3) 地域的特色を示すもの</p> <p>に該当する。</p>

参考文献

- 広井忠男著「民俗エッセイ 牛の角突きと異郷譚」『高志路』第336号
新潟県民俗学会 2000年4月
- 広井忠男著「南部牛、遙かなる越後への旅路」『高志路』第321号
新潟県民俗学会 1996年9月
- 広井忠男著「国指定重文越後闘牛 雄牛の祈祷と治療」『高志路』第381号
新潟県民俗学会 2011年10月
- 菊池正則、佐々木清文著「八戸藩葛巻商人の鉄山経営」『たたら研究』第57号
たたら研究会 2018年
- 名久井文明・名久井芳枝著『地域の記憶 岩手県葛巻町小田周辺の生活史』
一芦舎 2008年3月1日
- 名久井文明・名久井芳枝著『山と生きる』 一芦舎 2001年9月20日

分類表

大分類	中分類	員数	合計	総合計
牛方	1 笠	3	49	
	2 前だて	1		
	3 みの	17		
	4 はんぱき	5		
	5 わらじ	4		
	6 つまご	5		
	7 切刃	7		
	8 ながさ	1		
	9 竹水筒	1		
	10 弁当袋	1		
	11 つる鍋	4		
牛装備	1 鞍	13	39	165
	2 前打ち	1		
	3 荷つけ用具	2		
	4 ござ	1		
	5 おもづら	4		
	6 くつご	4		
	7 牛の鼻かん	1		
	8 鼻かんとどしがね	1		
	9 どじがね	2		
	10 牛のくつ	3		
	11 塩かます	4		
	12 かます	2		
	13 牛のつなぎ具	1		
牛飼育	1 爪切り	10	77	
	2 爪切り用木槌	2		
	3 牛のブラシ	3		
	4 物差し	2		
	5 薬を飲ませる竹筒	3		
	6 薬	2		
	7 牧草かま	4		
	8 フォーク	1		
	9 押し切り	6		
	10 とな切り	4		
	11 かぶ切り	6		
	12 とな釜	3		
	13 へら	4		
	14 飼葉桶	6		
	15 手桶	3		
	16 飼葉かぎ	3		
	17 となはり	11		
	18 こえかぎ	4		

牛方

分類番号			点数No	受入番号	名称	素材、資料の状態	使用方法	計測値 (mm)
大	中	小						
牛方	1	1	1	3045	笠	スゲ	牛方が頭に被る	径463×高107
牛方	1	2	2	6567	笠	スゲ	〃	径466×高127
牛方	1	3	3	135	笠	スゲ	〃	径558×高119
牛方	2	1	4	251	前だて	マダ	牛方が胸に着用	全長830×全幅490
牛方	3	1	5	2808	みの	(①マダ)	背に着用	全長1500×全幅750
牛方	3	2	6	1422	みの	(②マダ)	〃	全長1130×全幅680
牛方	3	3	7	6830	みの	(③マダ)	〃	全長1130×全幅600
牛方	3	4	8	673	みの	(④マダ)	〃	全長1350×全幅600
牛方	3	5	9	—	みの	(⑤クゴ)	〃	全長1200×全幅900
牛方	3	6	10	250	みの	(⑥クゴ)	〃	全長1130×全幅900
牛方	3	7	11	253	みの	(⑦クゴ)	〃	全長1000×全幅600
牛方	3	8	12	252	みの	(⑧クゴ)	〃	全長1110×全幅800
牛方	3	9	13	2750	みの	(⑨クゴ)	〃	全長1250×全幅650
牛方	3	10	14	638	みの	(⑩クゴ)	〃	全長1350×全幅650
牛方	3	11	15	1424	みの	(⑪クゴ)	〃	全長1170×全幅1000
牛方	3	12	16	256	みの	(⑫クゴ・海藻)	〃	全長1200×全幅700
牛方	3	13	17	247	みの	(⑬シユロ)	〃	全長1230×全幅600
牛方	3	14	18	257	みの	(⑭シユロ)	〃	全長1240×全幅600
牛方	3	15	19	3174	みのの材料	クゴ	みのの素材	長さ885
牛方	3	16	20	1425	みのの材料	クゴ	〃	長さ906
牛方	3	17	21	139	みのの材料	クゴ	〃	長さ780
牛方	4	1	22	167	はんばき	樹皮・馬の尾	脛あて	縦320×横355
牛方	4	2	23	3113	はんばき	スゲ・シユロ	〃	縦310×横275
牛方	4	3	24	5080	はんばき	スゲ	〃	縦255×横325
牛方	4	4	25	2972	はんばき	馬の尾・布	〃	縦255×横157
牛方	4	5	26	184	はんばき	スゲ・シユロ	〃	縦300×横400
牛方	5	1	27	3051	わらじ	ワラ	履物	縦230×横90
牛方	5	2	28	3034	わらじ	〃	〃	縦210×横83
牛方	5	3	29	3093	わらじ	〃	〃	縦232×横95
牛方	5	4	30	121	わらじ	〃	〃	縦262×横100
牛方	6	1	31	722	つまご	ワラ	履物	縦230×横130×厚110
牛方	6	2	32	754	つまご	〃	〃	縦275×横130×厚90
牛方	6	3	33	3037	つまご	〃	〃	縦250×横120×厚80
牛方	6	4	34	3038	つまご	〃	〃	縦250×横115×厚80
牛方	6	5	35	104	つまご	〃	〃	縦290×横140×厚90
牛方	7	1	36	4919	切刃	刃物と木のサヤ	牛方が携帯、道の枝切りや護身	全長429×幅60×厚46
牛方	7	2	37	2639	切刃	〃	〃	全長425×幅50×厚25
牛方	7	3	38	1050+1053	切刃	〃	〃	全長404×幅60×厚39
牛方	7	4	39	2988	切刃	〃	〃	全長274×幅62×厚32
牛方	7	5	40	2633	切刃	〃	〃	全長465×幅41×厚35
牛方	7	6	41	2985	切刃	〃	〃	全長300×幅47×厚34
牛方	7	7	42	2987	切刃	〃	〃	全長330×幅53×厚24
牛方	8	1	43	3897	ながさ	鉄の刃と長い木の柄	〃	長700×幅55
牛方	9	1	44	685	竹水筒	竹	牛方の携帯用水筒	長278×径70
牛方	10	1	45	624	弁当袋	イラクサ	携帯用の食事入れ	縦500×横70
牛方	11	1	46	607	つる鍋	銅、フタ有り	道中での炊事用	径240×鍋高93×全高245
牛方	11	2	47	2258	つる鍋	鉄、フタなし	〃	径151×鍋高75×全高172
牛方	11	3	48	2252	つる鍋	銅、フタ有り	〃	径250×鍋高122×全高270
牛方	11	4	49	215	つる鍋	鉄、フタなし	〃	径200×鍋高97×全高260

牛装備

分類番号			点数No	受入番号	名称	素材、資料の状態	使用方法	計測値 (mm)
大	中	小						
牛装	1	1	1	1916	鞍	①	牛の荷鞍	高508×幅626×奥712
牛装	1	2	2	1918	鞍	②	〃	高476×幅672×奥642
牛装	1	3	3	641	鞍	③	〃	高467×幅756×奥687
牛装	1	4	4	458	鞍	④	〃	高482×幅659×奥655
牛装	1	5	5	1195	鞍	⑤	〃	高536×幅689×奥592
牛装	1	6	6	1276	鞍	⑥	〃	高501×幅782×奥486
牛装	1	7	7	2428	鞍	⑦	〃	高491×幅723×奥704
牛装	1	8	8	2930?	鞍	⑧	〃	高483×幅829×奥615
牛装	1	9	9	1917	鞍	⑨	〃	高534×幅668×奥715
牛装	1	10	10	6342	鞍	⑩	〃	高521×幅718×奥666
牛装	1	11	11	3837	鞍の材料	木	鞍の素材	高604×幅822×厚46
牛装	1	12	12	3835	鞍の材料	〃	〃	高515×幅850×厚35
牛装	1	13	13	3827	鞍の材料	木、2点セット	鞍の製作途中品	高510×幅754×厚30、高494×幅915×厚30
牛装	2	1	14	2981	前打ち	マダ繩	牛の首に掛けた	長1391×幅259
牛装	3	1	15	1282	荷つけ用具	木、2点セット	荷鞍の一部	長245×幅76×厚25
牛装	3	2	16	8159	荷つけ用具	木、2点セット	〃	長326×幅85×厚37
牛装	4	1	17	2119	ござ	イグサ	道中の野宿での敷物	長1689×幅862×厚5
牛装	5	1	18	1269	おもづら	繩	牛の頭に装着	長485×幅133
牛装	5	2	19	1960	おもづら	〃	〃	長585×幅262
牛装	5	3	20	1961	おもづら	〃	〃	計測不可
牛装	5	4	21	1976	おもづら	〃	〃	長515×幅265
牛装	6	1	22	-	くつご	繩	牛の口に装着、道草防止	長355×幅197×厚67
牛装	6	2	23	1649	くつご	〃	〃	長350×幅130
牛装	6	3	24	3097	くつご	〃	〃	長350×幅195×厚103
牛装	6	4	25	2438	くつご	〃	〃	長675×幅155×厚75
牛装	7	1	26	682	牛の鼻かん	マダ繩	牛の鼻に装着	長198×幅98
牛装	8	1	27	2342	鼻かんとどしがね	銅、2点セット	牛の鼻と首に装着	鼻かん径80×厚9、どじがね径85×厚37
牛装	9	1	28	4049	どじがね	〃	牛の首に装着	径76×厚32
牛装	9	2	29	2814	鳴り輪(なりわ)	鉄	〃	長183×幅74×厚23
牛装	10	1	30	-	牛のくつ	ワラ	牛の爪の保護	長117×幅98×高78
牛装	10	2	31	113	牛のくつ	〃	〃	長122×幅100×高85
牛装	10	3	32	5089	牛のくつ	〃	〃	長119×幅100×高105
牛装	11	1	33	1218	塩かます	カヤ	塩を入れたカマス	縦560×横495×厚175
牛装	11	2	34	1219	塩かます	〃	〃	縦635×横564×厚196
牛装	11	3	35	不明	塩かます	〃	〃	縦550×横525×厚115
牛装	11	4	36	不明	塩かます	〃	〃	縦571×横556×厚145
牛装	12	1	37	852	かます	ワラ、二つ折り横長	道中の用具を入れる	縦500×横572×厚153
牛装	12	2	38	2122	かます	ワラ	〃	縦885×横790×厚40
牛装	13	1	39	745	牛のつなぎ具	木と繩	牛を繋ぎ止める用具	長530×幅151

牛飼育

分類番号			点数No	受入番号	名称	素材、資料の状態	使用方法	計測値 (mm)
大	中	小						
飼育	1	1	1	521	爪切り	鉄、マダヒモ	牛の爪切り	長226×幅74×厚17
飼育	1	2	2	522	爪切り	鉄	〃	長191×幅95×厚10
飼育	1	3	3	523	爪切り	〃	〃	長235×幅55×厚5
飼育	1	4	4	524	爪切り	〃	〃	長219×幅97×厚7
飼育	1	5	5	1246	爪切り	〃	〃	長209×幅73×厚27
飼育	1	6	6	3318	爪切り	〃	〃	長191×幅90×厚4
飼育	1	7	7	948	爪切り	〃	〃	長217×幅83×径26
飼育	1	8	8	949	爪切り	〃	〃	長273×幅86×厚26
飼育	1	9	9	2658	爪切り	〃	〃	長167×幅58×厚23
飼育	1	10	10	697	爪切り	〃	〃	長217×幅89×径27
飼育	2	1	11	525	爪切り用木槌	木	爪切りを叩く槌	長206×幅71×厚61
飼育	2	2	12	156	爪切り用木槌	ヤマガ、イタヤカエデ	〃	長275×幅152×厚54×径31
飼育	3	1	13	688	牛のブラシ	木、毛	家畜の毛櫛	長212×幅113×厚78
飼育	3	2	14	990	かねぐし	鉄	〃	長253×幅140
飼育	3	3	15	989	かねぐし	〃	〃	長205×幅130
飼育	4	1	16	1715	物差し	木	牛の身長を測る用具	長1086×幅34×厚22
飼育	4	2	17	424	物差し	〃	〃	長1567×幅30×厚20
飼育	5	1	18	684	薬を飲ませる竹筒	竹	牛に薬を与える道具	長252×幅49×厚43
飼育	5	2	19	691	薬を飲ませる竹筒	〃	〃	長186×幅45×厚41
飼育	5	3	20	2722	薬を飲ませる竹筒	〃	〃	長158×径38
飼育	6	1	21	2565	薬	カモシカの糞	子供の牛や馬に服用	計測不可
飼育	6	2	22	2615	薬	〃	〃	計測不可
飼育	7	1	23	1638	牧草かま	鉄、木	牧草を刈るかま	長1527×幅756×厚195
飼育	7	2	24	1639	牧草かま	〃	〃	長1515×幅664×厚201
飼育	7	3	25	67	牧草かま	〃	〃	長1495×幅767×厚196
飼育	7	4	26	921	牧草かま	〃	〃	長1517×幅766×厚207
飼育	8	1	27	1298	フォーク	鉄、木	牧草を集める	長1324×幅139
飼育	9	1	28	1344	押し切り	鉄、木	飼料や敷き草を切る	長774×幅114×高211、刃長
飼育	9	2	29	1108	押し切り	〃	〃	長990×幅290×高295、刃長430
飼育	9	3	30	928	押し切り	〃	〃	長1305×幅185×高310、刃長487
飼育	9	4	31	753	押し切り	〃	〃	長1281×幅140×高297、刃長437
飼育	9	5	32	729	押し切り	〃	〃	長907×幅252×高207、刃長326
飼育	9	6	33	-	押し切り	〃	〃	長1050×幅114×高280、刃長400
飼育	10	1	34	5748	とな切り	鉄、木	機械式の押し切り	高635×幅644×奥755
飼育	10	2	35	391	とな切り	鉄、木、布	〃	高653×幅660×奥843
飼育	10	3	36	922	とな切り	鉄、木	〃	高946×幅1490×奥913
飼育	10	4	37	3618	とな切り	〃	〃	高615×幅1125×奥865
飼育	11	1	38	1795	かぶ切り	鉄、木	カブやジャガイモ等を刻む	長828×幅150×径25
飼育	11	2	39	873	かぶ切り	〃	〃	長1270×幅145×径28
飼育	11	3	40	4895	かぶ切り	〃	〃	長1056×幅144×径67
飼育	11	4	41	4896	かぶ切り	〃	〃	長883×幅137×径30
飼育	11	5	42	5520	かぶ切り	〃	〃	長1041×幅138×厚77
飼育	11	6	43	947	かぶ切り	〃	〃	長1033×幅150×厚150
飼育	12	1	44	231+1744	とな釜	フタ付き、鉄、木	飼料を煮る釜	径762×高279
飼育	12	2	45	927	とな釜	鉄	〃	径899×高416
飼育	12	3	46	844	とな釜	板枠付き、鉄、木	〃	径715×高470
飼育	13	1	47	29	へら	木	とな釜をかき混ぜる	長914×幅151×厚39
飼育	13	2	48	40	へら	〃	〃	長1120×幅122×厚32
飼育	13	3	49	1577	へら	〃	〃	長1183×幅96×径38
飼育	13	4	50	71	へら	〃	〃	長1026×幅105×厚36

牛飼育

飼育	14	1	51	1560	飼葉桶	桶タイプ、木、竹、繩	エサ入れ	最大径460×最大高376
飼育	14	2	52	1618	飼葉桶	桶タイプ、木、竹	〃	最大径615×最大高344
飼育	14	3	53	243	飼葉桶	フネタイプ、木	エサ入れ	幅1185×奥595×高450
飼育	14	4	54	864	飼葉桶	フネタイプ、木	〃	幅1000×奥605×高245
飼育	14	5	55	7963	飼葉桶	フネタイプ、木	〃	幅907×奥436×高252
飼育	14	6	56	1619	飼葉桶	かき混ぜ桶	〃	径442×高255
飼育	15	1	57	7353	手桶	木、竹	とな釜から飼葉桶に移す桶	最大高313×高193×径215
飼育	15	2	58	5123	手桶	木、竹	〃	最大高303×高288×径206
飼育	15	3	59	1842	手桶	木、竹	〃	最大高501×高342×径350
飼育	16	1	60	512	飼葉かぎ	鉄、木	とな釜から手桶にすくう道具	長414×幅125×高181
飼育	16	2	61	514	飼葉かぎ	〃	〃	長300×幅173×高161、径38
飼育	16	3	62	518	飼葉かぎ	〃	〃	長386×幅142×高141
飼育	17	1	63	3651	となはり	木	飼葉桶の飼料を混ぜる	長1475×幅186×径40
飼育	17	2	64	3652	となはり	〃	〃	長1664×幅84×径33
飼育	17	3	65	3653	となはり	〃	〃	長1497×幅124×径45
飼育	17	4	66	3654	となはり	〃	〃	長1160×幅150×径28
飼育	17	5	67	6331	となはり	〃	〃	長1315×幅275×径28
飼育	17	6	68	1858	となはり	〃	〃	長1444×幅182×径25
飼育	17	7	69	1296	となはり	〃	〃	長1447×幅127
飼育	17	8	70	610	となはり	〃	〃	長1361×幅165
飼育	17	9	71	1466	となはり	〃	〃	長1415×幅197
飼育	17	10	72	59	となはり	〃	〃	長1297×幅135
飼育	17	11	73	58	となはり	〃	〃	長1488×幅135×径33
飼育	18	1	74	519	こえかぎ	木	牛の肥を外に出す	長1503×高337×幅217
飼育	18	2	75	520	こえかぎ	〃	〃	長1306×高225×幅524
飼育	18	3	76	1643	こえかぎ	鉄、木	〃	長1272×幅181×カギ長354
飼育	18	4	77	62	こえかぎ	〃	〃	長1246×高372×カギ幅156

資料 2-2

諮詢物件調書

種別	天然記念物（地質鉱物）
名称・員数	米田浜津波堆積物（まいたはまつなみたいせきぶつ）
所有者（保持者・団体）の住所・氏名（名称）	九戸郡野田村大字野田第20地割14番地 野田村
文化財の所在場所	九戸郡野田村大字野田第9地割83番地4
指定理由	<p>米田浜津波堆積物は、野田村の十府ヶ浦海岸の最南端付近に位置する米田浜の海食崖に保存されている。米田浜の背後の谷は、北北東に向かって開いており、谷の上流側には谷底から約5mの比高を有する段丘面が連続的に分布している。現在の谷はこれらの段丘面を掘り込み、これらの段丘面の末端の海食崖に米田浜の堆積物が見られる。</p> <p>米田浜の津波堆積物の露頭は、海食崖という位置を考慮すると、特に下位に位置する堆積物は津波による可能性の他、暴浪によって運搬・堆積した可能性もあるが、当該文化財に隣接する米田川低地では、複数の地点において掘削調査が行われ、堆積学的な観点から4層の津波堆積物が確認されており、少なくとも、当該文化財の露頭上部～中部の堆積物は本地域において広範囲に見られる津波堆積物が含まれていると判断できる。</p> <p>津波とともに海から海岸や内陸部に運ばれた土砂などが、波が引いた後もその場に残って堆積した津波堆積物は、その場所に津波が到達した証拠であることから、津波堆積物は過去の津波やそれをもたらした地震等を復元するために貴重な資料となる。また、米田浜津波堆積物は、過去の地震や津波の履歴に関する研究のみならず、地層断面の剥ぎ取りや学校での授業への活用により、岩手県民の教育の実践や防災への啓蒙活動にも利用してきた。</p> <p>当該文化財は、幾度となく津波の被害を受けてきた岩手県沿岸部において、これまでの津波堆積物が残存し地質学的にも学術的にも重要であり、その歴史を伝える意味でも重要な地層である。また、露頭の保存状況も良好で、これまでの災害の痕跡がはっきりと残っているため、防災教育などの観点からも今後の活用が大いに期待できる。</p> <p>以上のことから、本文化財を岩手県指定天然記念物に指定するものである。</p> <p>（指定基準）</p> <p>第5 史跡名勝天然記念物指定基準</p> <p>天然記念物</p> <p>3 地質鉱物</p> <p>（2）地層の整合及び不整合</p> <p>（5）地震断層など地塊運動に関する現象</p>



堆積の状況

写真提供：野田村教育委員会



指定予定地全景

写真提供：小岩直人（岩手県文化財保護審議会委員）

指定文化財調査報告書(記念物)

調査員 小岩直人

令和7年8月13日

1 所有者の住所・氏名	岩手県九戸郡野田村大字野田第20地割14番地 野田村
2 文化財の所在場所	岩手県九戸郡野田村大字野田第9地割83番地4
3 種別	天然記念物(地質鉱物)
4 名称	米田浜津波堆積物(まいたはまつなみたいせきぶつ)
5 員数	
6 範囲	19,344.08 m ²
7 時代又は年代	
8 現状	
9 保存・活用の方向性	
10 所見	<p>津波とともに海から海岸や内陸部に運ばれた土砂などが、波が引いた後もその場に残って堆積してできた地層は津波堆積物と呼ばれている。津波堆積物は、地層中で確認された場合、その場所に津波が到達した証拠であることから、過去の津波(古津波とする)、それをもたらした地震等を復元するための貴重な資料となる。</p> <p>津波による土砂の堆積・侵食を、初めて現代的・系統的に地質学的な記載をしたのは、今野(編)(1961)といわれている(後藤・菅原、2021)。その後、箕浦幸治氏は、1983年の日本海中部地震津波において、青森県十三湖に流入した津波がもたらした堆積物を検討し、古津波履歴を知るうえで津波堆積物が有効であることを示した(箕浦ほか、1987)。同年には、アメリカ西海岸で地層中から完新世の津波堆積物が報告されている(Atwater、1987)。2004年のインド洋大津波襲来後は、世界各国の研究者が津波堆積物に関する研究を実施、津波直後における堆積物の詳細な記載が数多く行われた。また、インド洋大津波が打ち寄せた地域において古津波の履歴についても調査研究が進展し、過去の津波の履歴が明らかにされてきた。2011年東北地方太平洋沖地震津波の発生以降は、膨大な津波堆積物のデータ、とくに高密度かつ広範囲での調査が実施され、津波堆積物と津波の水理量や地形との詳しい検討等も行われるようになる(後藤・菅原、2021)。</p>

甚大な被害をもたらした 2011 年東北地方太平洋沖地震津波では、想定以上の津波へ対応できず多くの人的被害が発生したことから、現在では、地震の想定には、地震学の知見を用いて考え得る最大クラスの地震・津波を想定することが必要とされている(中央防災会議、2011)。しかし、このような想定に基づいた巨大津波は、あまりに大きなものであり過去に実際に発生したかどうかは明らかではない「仮想最大クラスの地震・津波」であり、その想定が大きすぎるのではないかとの指摘もされている(たとえば藤原、2015)。これに対して、津波堆積物を用いた検討は、過去に物証に基づいたその地域に来襲する可能性が高い津波を想定することでき、実際の津波防災上有効であるという(後藤・菅原、2021)。以上のことから、津波堆積物の重要性は学術的な研究はもちろんのこと、防災上、社会的な重要性が高まっているといえるだろう。

野田村米田浜の海食崖では、平川(2012) により津波堆積物である可能性が高いと指摘された堆積物が保存されている。

野田村における宇部川の右岸側は、酸素同位体ステージ 11(約 40 万年前)、同じくステージ 5e(約 13 万年前)に形成された海成段丘の分布地域となっていて、これらは、明内川、泉沢川、米田川などにより開析されている。十府ヶ浦海岸の最南端付近に位置している米田浜は、海成段丘を刻む、流域面積約 0.7km²の小谷の出口にあたる。米田浜の背後に位置する谷は、北北東に向かって開いており、谷の上流側には谷底から約 5m の比高を有する段丘面が連続的に分布しており、現在の谷はこれらの段丘面を掘り込んでいる。土内の集落の多くはこの段丘面上に分布する。

米田浜の堆積物がみられるのは、これらの段丘面の末端の海食崖である。この地点における段丘面は標高 9m となっている。海食崖の東側には基盤岩である野田層群が露出しており、西側には小谷を埋積する堆積物が確認できる。現在は、崩積土によって埋没しているが、これらを取り除くと、腐植質の黒色土壌中に挟まれる中礫サイズの円礫が、数 cm～数 10 cm の厚さで堆積していることがわかる。この中礫は現在の汀線付近にみられる海浜礫と類似している。これらの礫層と黒色土壌の互層は、断片的ではあるが、地表面から約 5m 下まで観察することができる。

平川(2012)は、この海食崖の露頭の下部から、十和田カルデラ起源の十和田一中撮テフラ(To-Cu: 約 6000 年前降下)、十和田-a テフラ(AD915 年)を見出すとともに、黒色土壌中に挟まれる礫質堆積物を津波堆積物とし、To-Cu の下位に 3 層、その上位に 11 層の津波によってたらされた可能性のある堆積物を報告している。また、平川(2012)は、この礫質堆積物を挟む腐植質の土壌の放射性炭素年代測定、テフラの層準を考慮し、本地域では 500 年に一回の頻度で巨大な津波の襲来があつた可能性を指摘し、露頭上部にみられる堆積物は、明治三陸津波、1611 年慶長三陸津波、12～13 世紀の津波、869 年貞觀津波によってたらされたものと考えた。

米田浜津波堆積物の露頭は、海食崖という位置を考慮すると、本地点の露頭、とく下位に位置する堆積物は津波による可能性のほか、暴浪によって運搬・堆積した可能性も考慮しなければならないと思われる。地層中の堆積物を津波と認定

する決定的な特徴は存在しない可能性もある指摘されていることから(後藤・菅原、2021)、数多くの証拠から津波堆積物であることを示すことが必要になると思われる。2004年インド洋大津波、2011年東北地方太平洋沖地震津波以降の現世の津波堆積物の観察から、津波堆積物の代表的な特徴として、内陸薄層化・細粒化、層(ユニット)構造、級化・逆級化構造、葉理、偽礫が挙げられている(後藤・菅原、2021)。本調査地域に隣接する米田川低地では、複数の地点において掘削調査が行われ、上記の堆積学的な観点から4層の津波堆積物が確認されている(最上位の西暦869年の貞觀地震津波～2700年前; Inoue et al., 2017)。少なくとも、米田浜の露頭中～上部の堆積物は本地域において広範囲にみられる巨大な古津波による津波堆積物を含んでいると判断できると思われる。米田浜における歴史時代を遡る年代の津波堆積物についても、今後、多面的な調査をすることが必要になるであろう。

米田浜津波堆積物は、過去の地震や津波の履歴に関する研究のみならず、八層断面の剥ぎ取りや学校での授業への活用により、岩手県民の教育の実践や防災への啓蒙活動にも利用されてきた(たとえば小野寺、2023)。また、津波堆積物のAIによる判定の試みにも用いられている(佐藤ほか、2023)。いざにせよ、極めて保存状態の良好な米田浜津波堆積物は、津波堆積物の認定方法の確立や古津波を検討する際にも重要な資料となることから、学術的にも、防災的にもこの堆積物の価値を疑う余地はない。

多くの津波堆積物に関する調査は、ボーリングやジオスライサーを呼ばれる機材を利用して低地において採取し、それをもとに分析を実施している。これに対して、米田浜津波堆積物は、いわゆる段丘崖でみられる堆積物であり、高所に保存されていることが特徴といえるであろう。これは、大規模な掘削等を実施しなくとも(露頭の表面のクリーニングは必要)観察しやすいということを示す。しかし、同時にこの地形条件は、容易に侵食しやすくなることにも注意すべである。今後、適切な保存の検討が必要となると思われる。

11 その他参考となるべき事項	
12 指定等の該当基準	史跡天然記念物指定基準 天然記念物 3 地質鉱物 (2) 地層の整合及び不整合 (5) 地震断層など地塊運動に関する現象

引用文献

小野寺弘幸 (2023) 岩手県沿岸における津波堆積物を活用した教育活動. 地学雑誌, 132,

297-308.

小池一之・町田 洋 (2001) 海成段丘アトラス. 東京大学出版会

- 後藤和久・菅原大助 (2021) 津波堆積物の進展, 地学雑誌, 127, 199-214.
- 今野円蔵編 (1961) チリ地震津波による三陸沿岸被災地の地質学的調査報告. 東北大学理学部地質学古生物学教室邦文報告, 52, 1-40.
- 佐藤就太・駒井 武・中村謙吾・渡邊則昭 (2023) 機械学習による津波堆積物の地球化学的判別手法および簡易判定システムの提案. 地学雑誌, 132, 385-402.
- 中央防災会議 (2011) 東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会 中間とりまとめ～今後の津波防災対策の基本的考え方について～.
<https://www.bousai.go.jp/kaigirep/chousakai/tohokukyokun/pdf/tyuukan.pdf>
- 藤原 治, 2015, 津波堆積物の科学. 東京大学出版会, 283p. 箕浦幸治・中谷周・佐藤裕, 1987, 湖底底質堆積物中に記録された地震津波の痕跡—青森県市浦十三付近の湖沼系の例—. 地震第2輯, 40, 183-196.
- 平川一臣 (2012) 千島海溝・日本海溝の超巨大津波履歴とその意味：仮説的検討. 科学, 82, 172-181.
- 箕浦幸治・中谷 周・佐藤 裕 (1987) 湖沼底質堆積物中に記録された地震津波の痕跡—青森県市浦村十三付近の湖沼系の例—. 地震第2輯, 40, 183-196.
<https://doi.org/10.1186/s40645-017-0158-1>
- Atwater, B. F., 1987, Evidence for great Holocene earthquakes along the outer coast of Washington State. Science, 236, 942–944.
- Inoue, T., Goto, K., Nishimura, Y., Watanabe, M., Iijima Y. and Sugawara, D., (2017) Paleo-tsunami history along the northern Japan Trench: evidence from Noda Village, northern Sanriku coast, Japan. Progress in Earth and Planetary Science, 42, DOI

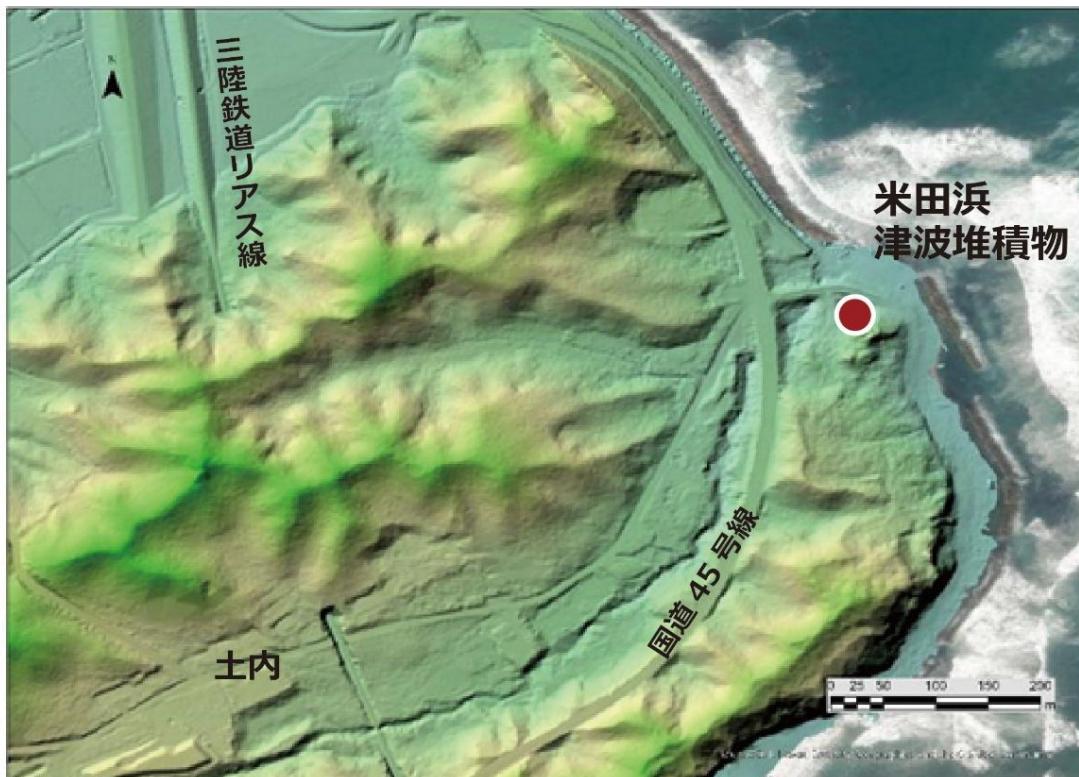


図 1 米田浜付近の陰影起伏図
 国土地理院の 5mDEM を用いて作成



図 2 米田浜津波堆積物露頭周辺のドローン画像

調査者撮影 (2025年8月12日)



図 3 米田浜津波堆積物の露頭写真

写真は野田村役場による。図中の波堆積物の位置は、野田村 (<https://www.vill.noda.iwate.jp/material/files/group/27/maitahama.pdf>) をもとに示したものである。

